

# 下川路村若連旧蔵上方歌舞伎台帳

安田 徳子

近年、古書商から購入した上方歌舞伎台帳六種九冊は、「下川路

下組若連之印」とある朱の角印が押されており、信州下川路村(現、

飯田市川路)の若連中が所有していたものである。宝暦十一年(一七

六一)二月二十二日より京四条北側芝居一の替り狂言『傾城勝尾寺』

三冊以下、『北条五代記会説』『けいせい素袍玉臺』『防州苗討松』

『姉妹達大礎』各一冊、『敵討浦朝霧』二冊だが、『歌舞伎台帳集成』

に翻刻のあるもの、未翻刻のものもあり、新出作品も含まれる。し

かし、地芝居用台本は、浄瑠璃本から作成したと思われる独自台本

や浄瑠璃本の転用が普通で、台帳が用いられた例はほとんどないの

で、台帳が纏まって所有されていたというのは興味深いことである。

下川路村は天保五年(一八三四)に三代目尾上菊五郎、同十三年に

は七代目團十郎が来村興行したことで知られる村で、こうしたこと

と関わりがあるかもしれない。そこで、まずこの台帳を検討し、台

帳が川路村に所蔵された経緯を辿っておきたい。

## (一)

1、傾城勝尾寺(けいせいかちをてら)

〔体裁〕半紙本(二八・〇×一九・一糎)。縦本。袋綴。表紙は香色

無地(第一・三冊裏表紙欠)。

〔外題〕「大門開／曲輪境」傾城勝尾寺」とあり、「大序／六巻之内」

〔第一冊〕、「三ノ詰／六冊之内」(第二冊)、「第四段目」(第三冊)と

ある<sup>1)</sup>。

〔内題〕なし(第一冊)、「三の詰」「三段目つめ」(第二冊)、「傾城

勝尾寺／第四ノ口明」(第三冊)

〔冊数・丁数〕三冊。各冊丁数は表紙を除いて、第一冊六二丁、第

二冊三七丁、第三冊五四丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕各冊別筆。

〔印記等〕奥書・識語等なし。表紙に「信州□河路□／若七者連□」

〔第一冊〕、「信陽下川路村／若連中」〔第二冊〕、「信川路／若者連中」

〔第三冊〕と墨書、最終丁に「下川路下組若連之印」の朱の角印がある。

本台帳は、表紙に記された「六巻之内」「六冊之内」の記述から、本来は全六冊で、その内の信州下川路村に伝存されていた三冊と知れるが、どの時点で三冊となったかは知るよしもない。冒頭に役割目録が記され、次いで本文となっているが、台詞の頭に記された名は役名で、台帳の通例である役者名ではないので、台帳を書き替えて写したものと思われる。

『傾城勝尾寺』は宝暦十一年（一七六一）一月二十二日よりの京四条北側芝居二の替りで初演された狂言で、この時の台帳の写しが東京大学文学部国語研究室（大総二八一―一六一、六冊、『歌舞伎台帳集成』14に翻刻）、京都大学付属図書館、愛知県立大学附属図書館、天理図書館等にあり、役割番付と絵尽しも伝存している。また、宝暦十一年（一七六一）三月刊の役者評判記『役者一向一心』に言及がある。これによると、作者は佐倉戸文作・中山吾八・藤川山八、座本は中村千蔵（お通姫）、中村喜津右衛門（奴関助）・市川団蔵（奴

国平・桜井十内）・今村七三郎（木下久吉）・桜山四郎三（若克佐市）・坂東助三郎（下人と茂九郎）・大尽石山）・芳沢崎之助（国平女房おかぢ）・中村兼太郎（芸子小いな）・大谷広八（三下監物）、尾上紋太郎（稲野屋半兵衛）・坂東幾蔵（木下常陸之助）などであった。内容は東大本台帳によれば六段仕立（番付及び愛知県大本台帳によれば五段、四段を口・詰に分けている）で、豊臣久吉の治下、故なき罪で滅びた豊臣秀次の遺児秀寿丸の謀叛と木下中将家のお家騒動を軸に、小いな半兵衛の恋を絡ませ、宵庚申のお千代半兵衛や三勝半七の逸話も取り込んで仕組んだもの。久吉の娘お通姫の許嫁、木下中将家の後室沖津御前と甥弾正は、若殿常陸之助を遊興放埒に溺れさせ、家宝の雄竜雌竜の旗と蛙丸の剣を紛失させ、中将家の乗っ取りを企んでいるが、常陸之助は、実は家老朝野監物が自分の子を取り替えたもので、中将の実子は稲野屋の息子半兵衛であった。これを加藤正清が暴く。その正清の奴国平は豊臣秀次の遺児秀寿丸と判り、秀次の亡魂から、自分と同じ巴の揃いの生れの旧臣長右衛門の血を交えて蛇の妖術を授けられ、天下を狙う。これも正清の機転により、術を破って、秀寿丸の野望砕き、勝尾寺で死者の菩提を弔わせる。口明は、この年一月二十五日が円光大師（法然）五百五十回忌に当たり、知恩院では大法会が行われていたので、これを当て込んだ趣向であった。

この台帳は、東大本の六冊の第一冊(白明)と第四冊(四ッ目)、第五冊(五ッ目)に当たる。内容は、各冊冒頭の役割目録は東大及び京大、愛知県立大所蔵の台帳とほぼ同じであるが、記載順序が異なり、加えて第三冊の「一 大工富士兵衛 市川常五郎」「一 下女おぼこ 民島千寿」「一 傾城吾妻路 嵐小伊三」「一 半兵衛女房その 水木吉三郎」「一 常陸之助幽霊 坂東幾蔵」がない。また、東大本などで、口明に「一 菱屋長右衛門 桜山四郎三郎」「一 富永屋小三郎 山下歌五郎」「一 同口まつ六 坂田和田八」「一 浅野弾正 中村万兵衛」とあるのが、第一冊には「一 福徳や庄兵衛 桜山四郎三」「一 柴屋町富永屋小八」「一 同口松治郎 和田八」「一 浅倉弾正 中村万兵衛」となっている。東大本四ッ目に「一 鼻そげ四郎 山下新五郎」「一 耳切三蔵 坂東満蔵」とあるのが、第二冊では「一 鼻そげ四郎 山下定之助」「一 耳きれノ八蔵 坂東万蔵」となっている。

また、本台帳には、冒頭には他本にない口上がある。少し長いが翻刻して示す。(句読点筆者)

作り物三間の間奥深キ山門のてい、筋違ニ桜の馬場より高ちやうちん、奥ひやう口橋掛りト両方まく吉津の茶店有り。知音院御忌のてい也。そうばん打、楽屋ニて物売のこへ、里々久いもまん中やゝかんとつくり、こへくニよはゝるしらせ、拍子木

ニて花道よりひたち之助・弾正いしやう羽織ニて出、花道まん中ニて

<sup>ひたち之助</sup>一是く弾正殿。けふハ此知音院の御忌、桜の盛りニ一トしゆか

うしたは、たゝ被逢たがそのしゆかうハとふて御座候ナ

<sup>弾正</sup>一さらはしゆかう御らんニ入ふか ○ふところよりかき物出し

今晚知音院御前ニおゐて御覧ニ入候。きやうげんのげだい大も

んひらさくるわのさかい傾城勝尾寺三番続、第一上<sup>初</sup>のげだい知音院様の盛ハ<sup>さ</sup>びらびやかなる唐人のすもふ、第二中のげだい大

津の町ニ山吹色の咲乱たる伊那野や次兵へおとらへて縄なへ、

第三切けたい島原のもみぢ山ニかうやうを見はせ悪人ともをつ

り狐千秋万歳楽、役人替名次第

<sup>ひた</sup>一おもしろいくとうさいく

<sup>弾正</sup>一木下ひたち之助ニ坂東幾蔵

<sup>ひた</sup>一是く弾正殿、身共もよび出スのか

<sup>弾正</sup>一傾城東路ニ嵐小伊三、伊那の屋半兵衛ニ尾上紋太郎、契情小伊

奈ニ中村桑太郎、かふる朝路野ニ篠塚民蔵、奴国平ニ市川団蔵、

女房おかしニ芳沢崎之助、かく言浅倉弾正ニ座本中村木津右衛

門、其外役付添打動マスル此処狂言始まして御居りませうな

らは、御しんひやうニ御一覽の程、こい願奉ます。先ハ勝尾寺

大ちよの始り左様ニト ○こところよりひやうしき出ス

本まく引。東路・小伊奈・あさちの小八・おのぶ、奥ひやうし

口のまくの前なみ能ならび居ル。ひたち之助ひつくりして

一ひたこりやとふしや

一東路庵さんおそかつたナア

一小いなひたちさんけふのしゆかうハこふしやカナア

一小八富永屋小八さまのしゆかうハこふでござんすいナア

一ひたち近來の大はね小八よつぽと作かなかたワイ

一小八いへくこりや浅倉さんのおく付御さけます

一彈正なんと若殿こふてやんす

一ひたちうまいくサアくまく内ニてさけにしやうくト

橋掛よりたくま坊あんばおりニてはさみ箱持せ出テクル

この口上によると、「大門開花街栄」の角書の「三段物」であつたことになる。しかし、本台帳二冊目には「三詰」、三冊目には「四ツ目」とあるし、東大本他の台帳も「口明」から「六ツ目」まで、愛知県大本は「五段目」まで、初演番付、役者評判記『役者一向一心』も「五段続」としている。ところが、『歌舞伎年表』によると、この年十二月二十五日より大坂天満天神境内芝居の二番目に「小いな傾城勝尾寺」中・下」とある。これ以上には資料がないので詳細は分からないが、この時は「三段物」の中下が上演されたと思われる。右の口上はこれと同じ形だったのかも知れない。口上の

後、本幕が引かれるが、東大本他では、冒頭の道具立の記述の後、

幾藏(常陸之助)・小伊三(東路)・糸太郎(小伊奈)・民藏(朝路野)・

仙四郎(与五郎)・万兵衛(彈正)・歌五郎(小三郎)が登場して、知恩

院山門前で一献の所へ新五郎(宅間芳庵)が登場、となっており、本

幕を引く所から始まっている。この後も、本台帳は東大本他と比べ

ると、筋立てはほぼ一致しているが、一件そっくり無い部分、ある

いは台詞が一部分省かれている部分、異なった台詞になっている部

分が多くある。これは、第一冊のみならず、第二・三冊も同様であ

る。こうした内容から、本台帳は東大本などとは別系統のものと考えられる。

右の口上に「浅倉彈正ニ座本中村木津右衛門」とあるが、役人替

名では「一 浅倉彈正 中村万兵衛」となっているし、東大本など

では「一 浅野彈正 中村万兵衛」とある。初演の番付では、「あ

さかだんじやうのせうひつ 中村万兵衛」とあり、絵尽しでは「あ

きだんじやうに万兵衛」と記され、『役者一向一心』の万兵衛評で

は「子息仙三殿は次第に芸はあがる、座本をして顔見せといひ、又

二のかはりも大入嚙満足と存じまする、此度あさかだん正と成」と

ある。中村喜津右衛門はいずれの台本でも加藤正清であり、初演番

付では「やつこせき介」、『役者一向一心』には「当二のかはり傾城

勝尾寺に奴せき介と成、……誠は加藤肥後守正清となりの」とあり、

絵尽しても「加藤きよ政」であって、弾正を演じたとする資料はない。また、この時の座本もいずれも中村千蔵としているので、本台帳は初演時のものではないとも考えられるが、「傾城勝尾寺」のその後の上演は、前述したこの年十二月二十五日より大坂天満天神境内芝居と文化十一年頃の伊勢松坂での上演しか確認できないし、これらの座本も役者も口上とは一致しない。一方、初演番付では、末尾に「中村喜津右衛門」と「中村千蔵」を並べ、両者に跨がるようにその上部に「座本」と記されており、相座本の可能性はある。

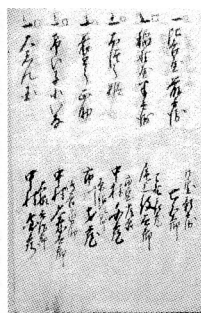
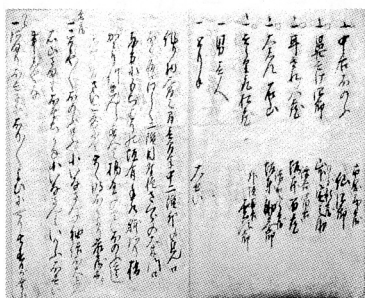
また、右の口上では「木下常陸之助」は坂東幾蔵であるが、初演の番付では「このしたわかさの介 藤川岡右衛門」「このしたよしかつ 坂東幾蔵」とある。絵尽しにも幾蔵には「此下よしかつ」と注されて若殿役、岡右衛門には「大との此下わかさのすけ」と記されている。『役者一向一心』にも、幾蔵評に「当二のかわり木下頼かつと成、いなはや半へを我かはりに逢せ、はたを盗まれ、むほん人たてわきが為に科を受ケ、誠は大領が子と聞驚キ」とある。これによれば、若殿は「よしかつ」で幾蔵の役、父大殿が「わかさのすけ」だが、台帳はいずれも「木下中将」の若殿「常陸之助」である。ちなみに、若殿の実父は、初演番付・『役者一向一心』では「三上大領」であるが、絵尽しでは「三上監物」で、台帳と一致している。さらに、前述した如く、本台帳で「福徳や庄兵衛」となっている役

は、他の全ての資料では「菱屋長右衛門」である。

このように『傾城勝尾寺』の諸資料を検証すると、何れの資料も骨子となる筋立ては同じであるが、登場人物の名にはかなり異同がある。新作の場合、上演までに色々改修が加えられた形跡を伝えていて興味深いのが、実際に初演された形はおそらく初演後に出版された役者評判記『役者一向一心』の記載であろう。そう考えると、初演は中村千蔵座本で五段続で上演され、愛知県立大学本の形がもっとも上演時に近い台帳と思われる。したがって、本台帳にある「口上」はなかったし、「口上」にいう「上中切」の三段物でもなかった。その一方で前述したように、同年十二月の天満天神境内の再演は三段物で、「小さな半兵衛」の角書から推すと小さな半兵衛の件を中心にしたものだったのではなからうか。そうすると、本台帳はこれと同じものかもしれない。しかし、「口上」中の配役は「中村木津右衛門」の「弾正」を除けば、ほぼ初演と一致するので、初演本台製作の段階で、小さな半兵衛の件を中心に書かれたものがあり、それは上演されなかったが、これをもとに、配役も座組も替えて、その年の十二月天満天神境内で上演されたということではなからうか。本台帳には「六冊の内」とあるので六冊で伝存されてきたという疑問は残るが、この三冊が「口上」にいう上中切に当たる可能性もある。

ところで、本台帳の二冊目の役割目録には、

- 一 比吉屋藤兵衛 七五郎 日室新兵衛
- 一 稲野屋半兵衛 天野喜藏
- 一 尾上紋三郎 市岡常治
- 一 おつう姫 中村千藏 原銀次郎
- 一 若とう正助 市川才藏
- 一 げい子小いな 梶谷勇助 中村象太郎 大脇兵次郎
- 一 大しん国 中村国藏 市岡茂兵衛
- 一 中居おのふ 仙四郎 日室新兵衛
- 一 鼻そけ四郎 山下定之助 鏑谷富吉
- 一 耳きれノ八藏 坂東方藏 結石宇兵衛
- 一 大しん石山 坂東助三郎 外垣長吉
- 一 そうり取松藏 松次郎



とあって、各役者名の脇に別の名が追記されている。台帳を写した筆跡と同筆のようであるから、写した時に書き込まれたものであるが、この名は役者名とは別のものと思われる。いかなる人物の名かはわからないが、これは地芝居で演じた時の素人演者の名前ではなからうか。

(一)

2、北条五代記会説(ほうでうごだいいきよりあひばなし)  
 「体裁」半紙本(二七・七×一八・五糎)。縦本。袋綴。白無厚紙表紙。

「外題」明朝賊船／和国神風 北条五代記会説／第二ツ目  
 「内題」明朝ノ賊船／和国ノ神風 北条五代記会説／中入ノ第二ツ目

「冊数・丁数」一冊。表紙を除いて六三丁。

「行数」原則として一〇行

「印記等」裏見返しに「信陽下伊奈郡下川路村若キ者」、裏表紙に

「信州下河路ノ若キ者」と墨書。

『北条五代記会説』は安永五年(一七七六)二月七日より大坂中の芝居の三の替りで初演された狂言で、この時の台帳は東京大学文学部国語研究室(大総二八一―一六〇、四冊)、京都大学付属図書館蔵

〔大惣本四・三二ヶ二、四冊〕、台帳集成39に翻刻されている。

両台帳の中で『歌舞伎台帳集成』39に翻刻された京大本が、その解説(松崎仁)にも述べられている如く、もっとも原型を伝えていると考えられ、東大本はその写しであろう。この時の二枚組役割番付と

絵尽しが残っている。配役は、三榊松之丞(美鳥、座本)、嵐雛助(花形大仁)、姉川大吉(江の島御前)、三升大五郎(武内式部卿)、沢

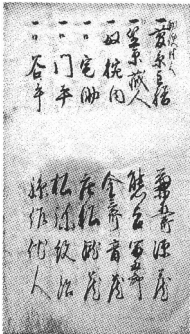
村宗十郎(左馬頭輝時)、嵐文五郎(台割大助)、尾上叡助(傾城此花)、三榊他人(奴谷平)などであった。

本台帳はこの「二二目 中人」に当たる一冊で、冒頭の役割目録、その後の本文は、京大本と比較すると、いくつかの台詞が省かれたり書き替えられているが、ほぼ京大本と同じである。したがって、

初演台帳の写しと思われるが、転写の段階で多少台詞を替えたり省いたりし、台詞頭注の役者名が役名に替えられたものと認められる。

ただ、役割目録の部分に、

- 一 菅原主膳 兼五郎 源蔵
- 一 笠置蔵人 熊吉 富五郎
- 一 奴腕内 金三郎 音蔵
- 一 一宅助 庄松 瀧蔵
- 一 一門平 松弥 紋治
- 一 一谷平 孫作 他人



などとあり、役名の下に二人の名が書かれており、下段は初演の役

者名であるが、上段の名はいづれのものかわからない。これも前述の『傾城勝尾寺』の二冊目と同様に、この台帳で地芝居を上演した

時の素人演者の名ではなからうか。したがって、これも初演時の台帳を写し、それを地芝居の台本として利用したものと思われる。

3、傾城素襖氈(けいせいすあをのだいら)  
〔体裁〕半紙本(二七・八×一八・〇糎)。縦本。袋綴。渋色厚紙表

紙。  
〔外題〕傾城素襖氈 第五目  
〔内題〕「岩倉三位魔道新術之事」早川帯刀正法妙術之事」傾城素襖

氈  
〔冊数・丁数〕一冊。表紙を除いて七二丁。  
〔行数〕原則として九行

〔印記等〕内表紙に「新野若」、裏表紙「新野ヨリ礼金百疋求之」  
下川路ノ若キ者ノ富久屋伝兵衛世話」とあり、内題右肩に「下川路

下組若連之印」の朱の角印がある。  
『傾城素襖氈』は安永六年(一七七七)十二月二十三日より大坂中

の芝居の二の替りで初演された狂言で、この時の台帳の写しが東京  
大学文学部国語研究室(大総二八一八四、五冊)、台帳集成36に翻

刻)に残っている。また、この時の役割番付、絵尽しが残っており、安永七年三月刊の『役者大矢数』に言及がある。これらによると、大序から六ッ目までで、役割番付一枚目の外題に「周防」とあるように、西国の大内家、尼子家の攻防に取材したもの。初演の配役は、市山太治郎(座本、春駒竹松)、中村歌右衛門(外科順宅)、沢村国太郎(門平妹おみよ・奥方青柳)、嵐七三郎(大内の助義隆・しやば弥次郎)、嵐三十郎(毛利元就・牛田源五兵衛・めのうの九八)、嵐吉三郎(貫ねら門平)、嵐文五郎(吉川景信・奴文字助)、嵐三五郎(陶やどりの介・早川帯刀)などであった。また、文政十一年(一八二八)一月十八日より大坂中の芝居で再演された時の台帳の写しが国会図書館(演劇台帳の内、八二四—一)にある。

本台帳は五ッ目で大詰に当たる部分、おそらく五冊中の最終冊である。冒頭の役割目録、その後の本文も、最末尾の幕切が短縮されている以外はほとんど東大本と同じ。したがって、本台帳は初演台帳の写しだが、書写の過程で、台詞の頭注が役者名ではなく、役名に替えられたものと認められる。ところで、本台帳は表紙、裏表紙の書き込みから新野の若連が持っていたものを、富久屋伝兵衛の世話で下川路村若連が金百疋で購入したという経緯であった。しかし、この台帳も冒頭の役割目録には、

(綴じ目で判読不可)

一 桑村弥藤治 竹五郎

中平乙吉

一 堀江与惣太 嘉十郎

□内吉祇

一 傾城春雨 亀之丞

今村源藏

一 傾城三浦 徳治郎

など、行間に別の人名が書き込まれている。これも地芝居上演の時の配役かと考えられるが、これが新野のものか、その後の下川路村のものか、あるいはそれ以前のものかはわからない。



4、防州苗討松(ぼうしうなへうちのまつ)

〔体裁〕半紙本(二五・八×一七・九糎)。縦本。袋綴。渋色厚紙表紙。

〔外題〕「越野官左衛門武名」 / 加田大八高名

東三十三間堂弓勢「防州苗討松」/ 第四

〔冊数・丁数〕一冊。表紙を除いて七五丁。

〔行数〕原則として七行

〔印記等〕裏表紙見返しに「濃州中津川ヨリ写之」、裏表紙に「信州下川路村ノ若者連中」とあり、最終丁に「下川路下組若連之印」



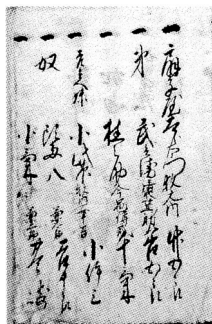
の朱の角印がある。

『防州苗討松』は安永九年(一七八〇)七月二十一日より京四条北東芝居で初演された狂言だが、この時の台帳はこれまで知られていない。役割番付及び絵尽しが残っている。これらによると、七冊仕立で、角書「越野官左衛門武名ハ西三十三ヶ国に通矢／加田大八高名ハ東三十三間堂の弓勢」、防州の吉川家を舞台としたものである。配役は、染松七三郎(座本、いつ、や彦三)、嵐雛助(加田大八)、嵐文五郎(かごしま新兵衛・百姓孫九郎)、中村十蔵(越野官左衛門)、姉川みさと(帯刀女房お弓)、三研大五郎(手塚軍兵衛・奴茶屋吉平)、中村吉十郎(陶伴之進・百姓李郎次・奴づた八)、桐山紋次(鬼柳戸田五郎・吉川城右衛門)、中村京十郎(越野勘次郎)などであった。

本台帳は、『防州苗討松』の台帳の第四冊に当たる部分と思われるが、冒頭の役割目録は、初演の番付・絵尽しと一致するので、初演台帳の写しの中の「第四」部分の一冊と考えられる。しかし、この台帳も台詞の頭注は役者名ではなく、役名になっており、転写によって、変形が加わっているかもしれないが、ともかくも新出の初演台帳である。役割目録部分を少し示すと、

- 一扇子屋太郎左衛門 牧之内 竹五郎
- 一弟 武兵衛 清水簗助 善五郎
- 一 桂之助 今邑伝蔵 千菊

- 一 吉兵衛妹 小紫 牧内幸吉 小伊三
- 一 奴 頭多八 兼太郎 吉十郎
- 一 小菊 兼二郎 豊崎



などである。人名が二段に書かれており、下段の役者名は初演の役割に一致が、上段の人名はやはり地芝居の配役と思われる。また、本書は、裏見返しの記事からすると、尾州領中津川にあった台帳を書写したものと知られる。

5、姉妹達大礎(あねいもとだてのおほきと)

〔体裁〕 大本(三三・六×二一・一種)。縦本。袋綴。白無厚紙表紙。

〔外題〕 「亀割坂／下紐関」姉妹伊達大礎／五ッ目

〔冊数・丁数〕 一冊。表紙を除いて四七丁。

〔行数〕 原則として一一行

〔印記等〕 裏表紙に「下河路／若連」とあり、最終丁に「下川路下組若連之印」の朱の角印がある。

『姉妹達大礎』は寛政七年(一七九五)一月十一日より大坂角の芝居の二の替りとして初演された狂言で、この時の台帳が、東京大学文学部国語研究室A(大総一八一―一、四冊)・B(大総二八一―二、五冊)と京都大学附属図書館(大惣本四・三二ア五)などに蔵されている。この時の役割番付・絵尽しも残っており、『役者時習講』にも記載がある。これらによると、中村金蔵(座本、娘おみつ)、嵐小六(橋本甚内・宇治兵部之介・楠原普伝)、嵐雛助(六太郎・入間与茂吉)、尾上新七(松江藏人・奴佐五平・大福屋宗六)、山村儀右衛門(志賀台七)、花桐豊松(兵部之介女房お節・甚内奥方いそさき)、吾妻藤蔵(お力)、山下八百蔵(宮城野)、藤川友吉(信夫)などであった。この作品は好評で、寛政八年(一七九六)一月二十七日より京四条南側芝居、文化三年(一八〇六)十月六日より大坂堀江市の側芝居、文化六年(一八〇九)五月七日より京四条北側芝居、文化十年(一八一九)一月二十六日より大坂角の芝居など、上演が繰り返されていた。名古屋や伊勢など地方での上演も多い。本作品は、安政九年(一七八〇)江戸で初演された浄瑠璃『碁太平記白石噺』と同じく、奥州伊達領内の白石足立村の百姓四郎左衛門が手討ちにされ、その娘二人が六年間の苦心の末に、敵田辺志摩を討ったという実話を元に、伊達家と淡島家のお家騒動を搦めて脚色したものである。上方では『碁太平記白石噺』も上演されてきたが、『姉妹達大礎』も人気が高

く、台帳も初演以外のものも残っている。

本台帳は、「五ツ目」とあり、五冊仕立ての東大本Bの最終冊と近似している。しかし、冒頭の役者目録は、

一 入間与茂吉      あらし雛助  
 一 加藤七左衛門      平二郎  
 一 吉見勝左衛門      門十郎  
 一 坪内夕伝      団八  
 一 松田弥太七      音羽次郎三  
 一 奴綱平      中村歌右衛門  
 一 しのぶ      藤川友吉  
 一 金江半兵衛      あらし吉三郎  
 一 佐五平女房お力      吾妻藤蔵  
 一 宮城野      山下八百蔵  
 一 兵部之介女房お節      花桐豊松  
 一 頼羽黒右衛門      山村儀右衛門  
 一 奴左五平      尾上新七  
 一 宇治兵部之助      あらし小六

とある。「団八」「平二郎」以外はほぼ初演の役者であるが、「加藤七左衛門」「吉見勝左衛門」など、役名は初演番付と一致しないものがある。台詞の頭注は役者名で記されており、役名は確認

しがたい。ただ、その後の番付を見ると、主要役名は変わらないが、其の他は、上演毎に異同が見られるので、役者名は初演時のまま残しているが、役名は書写、使用する時に書き替えたのかもしれない。

6、敵討浦朝霧（かたきうちうらのあさぎり）

〔体裁〕半紙本（二三・〇×二六・八糎）。縦本。袋綴。第一冊は白無地厚紙表紙、第二冊は本文共表紙。

〔外題〕「那智山／御利生」敵討浦朝霧」とあり、「初段目」（第一冊）、「五段目」（第二冊）。

〔内題〕第二冊に「五ッ目」

〔冊数・丁数〕二冊。各冊丁数は表紙を除いて、第一冊五〇丁、第二冊五六丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔印記等〕書入・奥書・識語等なし。第一冊表紙見返しに「林柯」の長角印（複数）。

『敵討浦朝霧』は文化十二年（八一五）九月十九日より大坂中の芝居で初演された狂言で、この時の台帳の写しが東京大学文学部国語研究室（大総二八一—一〇〇、三冊）に残っている。この時の役割番付・絵尽しも残っている。また、この上演はその二ヶ月後の十一

月十五日より京四條南側芝居の顔見世に引越して同じ座組で再演され、『役者謎懸論』でも評せられている。文化元年（一八〇四）に明石で起こった暴君松平兵部大輔を獵夫源内が射殺した事件に、那智山の女巡礼殺しを擲めて、網干家のお家騒動として仕組んだもので、上方ではしばしば上演が繰り返された人気作品であった。初演時は、三柎愛之助（座本、娘おつる）、嵐吉三郎（網干右兵衛之輔・小割伝内）、浅尾工左衛門（門番松兵衛・笹屋半兵衛）、嵐猪三郎（虫壳露八・有田せ平）、中村歌六（傾城満月・伝内女房おふさ）、中山文七（清水李之進・伝内母かつの）、嵐冠十郎（唐橋弾正大弼・ちよんがれ巖山）、芳沢いろは（李之進妻関屋）、沢村田之助（お須磨の方）などであった。

本台帳は、「初段目」と「五段目」の二冊だが、第一冊目には冒頭に京南側芝居の時の番付の一枚目が転写されているが、役者目録には「弓井主斗 嵐橋三郎」「市川團十郎」「清水李之進 中山文七」などとあって、むしろ初演の配役に近い。ただ、役名もなく「市川團十郎」の名が入っているのが疑問であるが、書写時の誤入と思われる。第二冊目の「五段目」の方は、役者目録は初演時に一致している。台詞の頭注は役者名で記されたままで、本文はほぼ東大本と一致している。したがって、これは初演台帳の写しと見てよいであろう。

以上、旧下川路村若連中が所有した台帳を紹介・検討したが、この六種は全巻が揃っているわけではなく、僅か一冊のみの零本が多い。しかし、『傾城勝尾寺』は他に伝存されているものとは別系統の台帳であるし、『防州苗討松』は「第四」の一冊のみだが、これまで所在を聞かないので、新出台帳として貴重であろう。こうした点に、台帳資料としての意義も認められるが、地芝居との関わりについて、少し検討する。

この台帳が所有されていた下川路村は、現在は飯田市内だが、飯田市中心部から五軒ほど南下した天竜川右岸の肥沃な農地と河川交通で、比較的豊かな村であった。飯田は、飯田街道を通じて甲州さらに江戸、尾張さらに上方、そして三河・遠州と濃密な交流があり、伊那地域の拠点として東西文化の流入も盛んであった。その隣接地川路には飯田の状況はすぐに伝わったであろう。さらに、川路は天竜川を伝ってくる文化もまた速く伝わってきた。こうして、川路には享保頃には人形芝居や歌舞伎も伝わっていたらしい。飯田藩では、人形芝居や歌舞伎を領民が楽しむことに、繰り返し禁令を出していた。ところが、下川路村は隣接の下條村などとともに飯田藩領ではなく、美濃高須藩領であった。高須藩は尾張藩二代徳川光友の子義行が美濃高須二万石に封ぜられて以来の尾張藩支藩だが、藩領の

半分は飯田の南側伊那地域にあり、山本村竹佐(現在、飯田市)にあった陣屋の代官が支配していた。この領内は、万事に於いて寛大で、歌舞伎や人形芝居などの芸能も全く禁令は出されなかったので、盛んに行われていた。著名な話であるが、この川路では、天保元年から村内有志が集まって、八幡宮境内に回り舞台を持つ小屋を建て、天保三年に完成したという。天保五年には三代目尾上菊五郎、天保十三年には七代目市川團十郎、弘化三年(一八四六)には三代目坂東三津五郎が来村し、それぞれこの小屋で興行した。伊那の山間の小さな村に江戸の名優が次々と訪れたというのは、驚くべき事である。村の有力者がこれらの役者たちと個人的な親交があって、これによって招致できたといった事情があったとしても、この村民が如何に歌舞伎好きであったか、豊かであったかを裏付けている。

また、七代目團十郎の招致に尽力した関島家には、現在も関係資料が保存されているが、七代目團十郎関連のみならず、下川路村の地芝居に関わるものも含まれているらしい。その中に、「嘉永元年甲七月「萬根本丸本目録」なるものがある。この目録には「七代目海老蔵秘蔵根元直写」として七代目團十郎が川路興行に所持していた自筆の台帳・抜書を関島家が書写したものの一覧も記されているが、資料の中に「嘉永元年甲七月根本丸本出入帳」なるものもあり、菊池明・林京平両氏によれば、これには「貸出先、日時等が記され

て」いて「この蔵書は近郷近在の地芝居上演のために一種の図書館的な役目をしたものらしい。」<sup>53</sup>という。本論考で取り上げた台帳類も、あるいはこの関島家の蔵書と関わるものかもしれないが、関島家の目録も蔵書も披見していないので、確認はしていない。

江戸時代の下川路村や近隣の高須藩領内の村では、寛大な支配の下、盛んに地芝居が行われ、その上演のための台本として台帳や丸本を収集し、関島家のような村の有力者や村の若者組で保管してきた。そうして関島家の「出入帳」が裏付けるように、それを相互に貸与し合ってきたのであろう。本論考で取り上げた台帳にも、「新野」の若者組から入手したものや「中津川」から入手したものもあり、下川路村では伊那地区のみならず、尾張藩領内の町や村とも交流を持ち、台本を収集していたことが窺われる。

この台帳類の書写時期あるいは入手時期がわからないので、こうした活動が何時から行われていたのかはわからない。しかし、各地に残る地芝居台本を調査すると、そのほとんどが義太夫物で、しかもト書きを持たない台本あるいは丸本や浄瑠璃本である。また、幕末以降の台本の多くは振付師匠が所有したもので、横長本で旅芝居に使用したものである。本論考で取り上げたような歌舞伎独自作品の台帳はほとんど見られない。<sup>54</sup> 僅かに、三河足助(愛知県豊田市)の台本群に一〜二種の歌舞伎台帳が含まれているが、文化文政期から

天保期頃に所有、使用したもののようである。また、前述した如く、下川路村では、天保期の三代目菊五郎や七代目團十郎の興行を見ても、江戸との関わりが深かったようであるが、本台帳群は上方芝居の台帳ばかりである。下川路村は高須藩領として尾張藩と関わりが深かったから、名古屋や東濃の地芝居とも親交があったであろう。この地域は上方芝居と関わりが深かった。こうしたことを勘案すると、この上方芝居の台帳が入手されたのは、下川路村の地芝居が、江戸との関わりを深くする以前だったのではなからうか。あるいは足助と同じ頃に入手、使用されたものかも知れない。

それにしても、上方大芝居の初演台帳が地芝居に伝承され、上方芝居ではほとんど上演されなくなっていった作品が、地芝居で行われていたらしいというのは非常に興味深いことである。地芝居の上演には義太夫が必須であった。義太夫の語りに従って芝居が進行した。地芝居の上演演目の大半が義太夫物というのがそれをよく裏付けている。ところが、これらの台帳には義太夫は記されていないし、台帳からは義太夫を使って上演した形跡も読み取れない。とすると、これらの作品を義太夫を使わずに上演したのであろうか。そうだとすると、これは地芝居としては珍しい形態だったことが想像されるが、実態については今後の課題である。

(1) 翻字は通行の漢字で示した。「ㄥ」は改行、「□」の中は文字が小さいことを示す。○内には第二冊以下の第一冊と異なる部分を示した。

(2) 浦山政雄「『けいせい勝尾寺』について―小いな半兵衛物における―」(『実践国文学』六 昭和四九年七月)に詳細な梗概がある。

(3) 『川路村誌』(昭和六三年三月)、村沢武夫『伊那の芸能』(昭和四二年一〇月 伊那史学会)

(4) 『図録 七代目市川團十郎展―生誕二百二十年によせて―』(平成三年九月 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)

(5) 菊池明・林京平「信州川路と市川海老蔵」(『演劇研究』六一九七三年四月)

(6) 拙著『地芝居の上演狂言に関する研究―東濃・南信・三河地区を中心に―』(平成13・14・15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究報告書 平成一六年三月)、拙論「地芝居における義太夫の重み」(『日本歌謡研究』五〇 平成三年二月)

追記 本論考は、平成二三年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(一般))の研究成果の一部である。